

パネルディスカッション

報告Ⅰ

「仁淀川流域における木文化プロジェクト」

報告Ⅱ

「由良川流域における木文化プロジェクト」

総合討論

柴田 前半は楽しいお話しをいただきました。新たな視点というものもご提案いただいたように思います。けれども、実際問題どうしていったらいいのだろうかということになります。それを、京都大学フィールド研はずっと考えてきています。それを少しご紹介させていただくのが、この後半の最初の目的といえます。

先ほど、理事のあいさつにもございましたが、時計台対話集会というのはもう六回目。この「森里海連環学」という言葉をずっと口にしてきましたが、ようやく本格的に動き出すことができるようになったところです。私の今日の役割はコーディネーターですがそのあたりを少し発言させていただきましたと思います。

フィールド研ができて今年ですでに七年目を迎えます。毎回ご参加いただいている方には申し訳ない話ですが、ちよつと経緯を紹介させていただきたいと思います。このフィールド研は、もともと農学部附属でした農学系の紀伊大島実験所、あるいは林学系の演習林三つと試験地三つ、それから水産学系の実験所が一つ、さらに理学部から瀬戸臨海実験所、これらの施設が集まってフィールド研というものができたという流れがあります。この時に集まった研究者たちが何を考えたか。それまでは、森の人間は森のこ

としか考えなかった、海の人間は海のことしか考えなかった。だけど、視点を新たに面白く研究をしよう。「協同して、何かやりましょう」ということを考えたわけです。当時すでに二十世紀になっていました。先ほど、あんまくだなるどさんのお話にあつたように、八〇年代にはもうすでに急速に変化していた日本の自然というのがありました。けれども、二十二世紀に入ると加速度的に、森も海もちよつとおかしいのではないかというふうな感じがしてきました。二〇〇三年にフィールド研ができ、その翌年に、これは皆さんの頭にもあざやかに残っているかと思いますが、日本中を台風が襲いました。この写真にありますように、これは我々が研究対象にしている由良川の河口域で起こったのですが、バスが水没して、乗客が二晩屋根の上で過ごしたという事故が起こりました。あえて天災とはいわずに事故と言いますが、こういうことを通して、社会一般が、やはり「森がおかしいのではないか」という問題意識を共有するようになったというふうに思っています。当然、その影響は海にも及んでいると。これもこのころから、一般でも思われるようになったというふうに考えられます。

そのような中で、二〇〇三年にフィールド研ができました。み

んなで一緒に何か新しい視野をもつてやろうよという学問分野です。初代センター長の田中名譽教授、あるいは竹内名譽教授が中心になり、「森里海連環学」という言葉が作られました。今申し上げたようなさまざまな問題を解決するために、総合的に、学際的にものを考えていこうというスタンスで考えられた言葉です。具体的にいきますと、ここに書いてありますように、森、里、沿岸の各生態系のつながりを自然科学のみならず社会科学も含めた両面から説明することを目指す、ということになります。自然科学的に見ますと、それぞれの生態系は互いに独立していないということです。ひとつの生態系が荒れてしまうと、他にも影響が出ていく、その逆もあるだろうと。ひとつうまく戻せれば、他にも良い影響が出るのではというような意識です。そのなかでもやはり、一番のキーは山のほうだろうと。先ほどのお話にもありました、漁師さんも山に目を向けていると。やはり山が大切、山をまずキーにしたほうがいいたろうというわけです。

そういう目で山を見ると、先ほど平沼さんから「山へ入ってがっかりした」というお話がございましたけれども、問題の人工林があります。これが実は、日本には一千万ヘクタールもあります。国土

の四分の一以上が人工林です。その一方で、もう一つの森林として、里山があります。これも、もう薪を採らなくなったので放っておかれた山です。この二つの荒廃が、川そして海にも影響を与えている。まず、そういう問題意識を持つ。そういう中で、もう一度森林を適切に管理すれば、川や海にも再生が促されるだろうと。これを科学的にやろう、という意志を持ってやり出したということです。

フィールド研としましては、「森里海連環学」による地域循環木文化社会創出事業」をやりたいということで、長年活動してきました。その中で、学内におきましても、また学外におきましても、さまざまなところからご理解をいただいて「一緒にこの研究を進めましょう」という機運が高まっておりました。先ほど、自然科学系と社会科学系と申し上げましたが、いずれにしても一番上にこの森林の植生管理、まずここからすべてが始まるという考えです。こちら、左半分が自然科学系ですが、まず管理をしたところ自体、森自体の植生に変化があるだろう。それに隣接する川にも変化があるだろう。それが少しずつ下流に影響が向かって、最終的には沿岸まで行く。これがひとつ、自然科学系であります。森林管理そのものがいろんな生態系にどうという影響

を与えるのかという視点ですね。

ただこれだけでは、先ほど平沼さんの話にもありましたように、山の人間には全然儲けにならない。結局、若い人も帰ってこない。そういう中で、これがうまく資源として回っていく視点も必要であろうという考えが、この右側の流れです。資源そのものがどう流れていつているのだろうか。実際はどうなのだ。そういうことを知った上で、新しいさまざまな提案。ここに、Topicと書いてあります。これは平沼さんと同じような考えで、間伐材を使った、京都大学に知的財産権がある、耐震構造の木造建築物です。こういう風なものを使った新たな提案を行いたい。できるだけ地産地消的に、近場で、その木材資源が使われるようなことを考えていきたい。これがもう一つの社会科学系の調査研究ということになります。これらをあわせて最終的に、このタイトルでもあります「地域循環木文化社会創出」への提案ということを考えようというわけです。

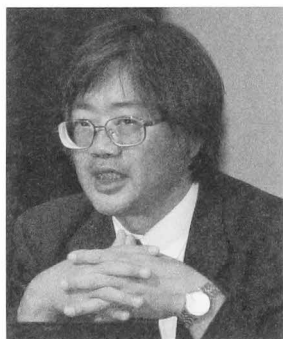
一方、今言いました以外に、これも社会系の話になりますけれど、環境評価というもの、あるいはそこに住んでおられる方々の意識調査というふうなものも含めていきたいと。かなり壮大です

が、我々は略称「木文化プロ」と呼んでおります。目指していることは、自然の再生だけではない、解決策はそれだけではおさまらないのだという認識をしつかり持とうということです。つまりは、人々の生活も見なければいけないし、その一方で、森林資源の使い道がないというのであれば、新しく使い道を見つけようと。なおかつ、人々が支えてきた文化、あるいはそれをさらに進化させるような評価もしてみたい。というのが、大まかに言いますと、目指していることになろうかと思えます。

我々はその中で、後でご紹介いただく二つの流域を選びました。ひとつは京都府の由良川水系、もう一つは高知県仁淀川水系。一方は日本海に流れ込む川、片や太平洋に流れ込む川ということ、この二つをそれぞれ研究することによって、日本全国展開できるようにモデル研究ができるのではないかと、いふうに考えています。この両流域に関する詳しい話は後ほど、お二人の、我々の仲間にお願したいと思います。で、「現在、これで何が言えるのだ」と言うことですが、ひとつには、新しい森林管理というのが提案できるのではないかと。これによって森林再生というものの可能性を広げていけるだろうといふうに考えています。それが

ら、二つ目として、森から海にいたるそれぞれの生態系というものが考えられるわけですが、少なくともひと昔前のような「連環」を再生する、それを目指す上でのさまざまな知見を得ることが出来るだろうというふうに思っています。それに基づいてさらに提案をしていくことが、我々が期待している、したいと思っっていることです。そして最終的にはこれらの成果を合わせて、ちよつと表現は悪いですが、疲れ切つてしまっている日本の農村・漁村そのものの再生を可能にするための「地域循環木文化社会創出」というところにつなげていきたい。というのが、我々が考えている成果ということになります。

で、七年前にできたのなら、さつさとそれをやればいいんじゃない



コーディネーター

柴田 昌三 しばた しょうぞう
 (京都大学フィールド科学教育研究センター副センター長・教授)

1959年京都市生まれ。07年より現職。専門は里山資源保全学、竹類生態学、緑化学。世界竹組織常任理事、日本造園学会理事、日本緑化学会副会長、日本森林学会評議員等。荒廃が進む里山を対象に、多様性回復のための再利用に関する研究、拡大竹林の管理に関する研究等を行っている。

いかということですが、実は、我々が言っていることを理解してもらえない部分があります。ようやく今年度から事業を開始できるようになりました。「通つたけど、予算は二割しか付かなかつた」とかいろいろつらい部分もありますが、それでもこれは、やらないと仕方がないだろうということ、まさに本格的にこういう話が始められるようになったのが今年度ということ。

その実際につきましては、先ほどご紹介しました高知県の仁淀川流域、それから京都府の由良川流域、それぞれについて、最高責任者になっていただいているお二人の先生にご紹介をいただきましたと思います。